

姫路市

神屋町遺跡

—姫路駅周辺地区総合整備事業（キャスティ 21）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—



平成 31 (2019) 年 3 月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

姫路市

神屋町遺跡

—姫路駅周辺地区総合整備事業（キャスティ21）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成31（2019）年3月

兵庫県教育委員会

例　　言

- 1 本書は、姫路市神屋町に所在する神屋町遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、姫路駅周辺地区総合整備事業（キャスティ21）に伴うもので、姫路市の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部を調査機関として実施した。
- 3 調査の推移
(発掘作業)
確認調査 平成25年12月4日～平成26年2月18日
実施機関：(公財) 兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
本発掘調査 平成25年12月4日～平成26年2月26日
実施機関：(公財) 兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
工事請負：栄伸工業株式会社
(出土品整理作業)
平成26年5月1日～平成31年3月31日
実施機関：(公財) 兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
- 4 本書は、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部 鐢 英記・菱田淳子・多賀茂治が執筆し、八木和子の補助を受けて多賀が編集をおこなった。
本文の執筆は、第1章・第2章・第4章第1節土器及び第4節ガラス製品を多賀、第3章・第6章を鐢、第4章第2節石製品・同第3節金属製品・同第5節木製品を菱田が担当した。第5章については一般社団法人文化財科学研究センターによる報告書の原稿を掲載している。
- 5 遺跡の空中写真測量は株式会社GIS関西神戸営業所に委託して実施した。
- 6 遺物写真の撮影は株式会社クレアチオに委託して実施した。
- 7 木製品の樹種同定、動物遺体、貝についての自然科学分析は一般社団法人文化財科学研究センターに委託して実施した。
- 8 本調査において出土した遺物や作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	
第2節 発掘調査の経過	
第3節 出土品整理の経過	
第2章 遺跡の位置と環境	4
第3章 調査の成果	7
第1節 確認調査	
第2節 本発掘調査	
第4章 出土遺物	9
第1節 土器	
第2節 石製品	
第3節 金属製品	
第4節 ガラス製品	
第5節 木製品	
第5章 自然科学分析（骨・貝同定）	15
第6章 まとめ	17

挿図目次

図1 遺跡の位置	4	図3 レール断面	10
図2 周辺の遺跡	5		

表目次

表1 樹種同定結果一覧表	11	表7 ウマ・ウシ臼歯計測値	16
表2 土器一覧表	13	表8 ウシ・ウマの下顎骨計測値	16
表3 石製品一覧表	13		
表4 金属製品一覧表	14		
表5 木製品一覧表	14		
表6 神屋町遺跡（第2ブロック旧流路）出土の動物遺存体同定結果			16

図版目次

- | | |
|----------------------------|---------------------|
| 図版1 調査位置図 (1/10,000) | 図版6 土器1 (1~27) |
| 調査範囲図 (1/2,000) | 図版7 土器2 (28~42) |
| 図版2 調査区全体図 (1/400) | 図版8 石製品・金属製品 |
| 図版3 遺構平面図 (1/400) | 図版9 木製品1 (W1~W24) |
| 図版4 北壁土層断面図 (縦1/40・横1/100) | 図版10 木製品2 (W25~W35) |
| 図版5 確認調査土層柱状図 (1/40) | 図版11 木製品3 (W36~W49) |

写真図版目次

- | | |
|-----------------------|---------------------------|
| 写真図版1 空中写真 (北東から) | 写真図版6 調査前遠景 (北から) |
| 全景 (北東から) | 機械掘削状況 |
| 写真図版2 調査区全景 (北東から) | 遺物検出状況 |
| 調査区全景 (南西から) | 実測図作成状況 |
| 流路全景 (北から) | 空中写真測量状況 |
| 写真図版3 北壁 (南西から) | 現場説明会 |
| 北壁 (南から) | 埋め戻し状況 |
| 東壁 (北西から) | 写真図版7 土器1 |
| 写真図版4 流路内獸骨出土状況 (北から) | 写真図版8 土器2 |
| 流路内獸骨出土状況 (北東から) | 写真図版9 土器3 |
| 流路内獸骨出土状況 (南から) | 写真図版10 土器4・石製品・金属製品・ガラス製品 |
| 流路内獸骨出土状況 (南から) | 写真図版11 木製品1 |
| 写真図版5 土師皿出土状況 (南から) | 写真図版12 木製品2 |
| 刷毛柄出土状況 (西から) | 写真図版13 官営八幡製鉄所製レール |
| 漆器椀出土状況 (北西から) | 写真図版14 動物遺存体 |
| 漆器椀出土状況 (西から) | (撮影 文化財科学研究所センター) |
| 漆器椀出土状況 (北から) | |
| 木札出土状況 (北から) | |

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

兵庫県姫路市は、姫路市駅前町から神屋町にいたる地区で姫路駅周辺地区総合整備事業（キャスティ21）を計画し、順次整備を進めている。今回の調査対象地はキャスティ21のイベントゾーンにあたり、かつて扇形庫や転車台を備えた旧国鉄の姫路機関区が所在した場所である。調査当時は文化・コンベンションエリアとして整備が計画され、区画整理や鉄道高架事業によって鉄道関係の施設が撤去された後はイベント会場や住宅展示場等として暫定的に利用されていた。

イベントゾーンの一部が周知の埋蔵文化財包蔵地である神屋町遺跡（兵庫県遺跡地図番号：020461）に該当することから、姫路市教育委員会の判断により、事業地内の埋蔵文化財について発掘調査を実施することとなった。

第2節 発掘調査の経過

発掘調査については、姫路市教育委員会での対応が困難であったため、県教育委員会が支援をおこなうことになり、姫路市からの依頼（平成25年8月29日付け）を受けた県教育委員会が、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センターに調査を委託して実施した。

調査対象地の北西に隣接する市道（土地区画整理道路十二所線）部分について平成7年度に姫路市教育委員会の調査がおこなわれており、そのデータから道路近接部については遺跡が広がることが確実であったため、面積1320m²の範囲について本発掘調査を実施した。それ以外のエリアについては、姫路機関区の転車台等の施設により破壊されている可能性が想定されたため、確認調査を実施し埋蔵文化財の有無を確認した。

[確認調査]

遺跡調査番号 2013123

調査主体 兵庫県教育委員会

調査担当者 （公財）兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部

調査第1課 鐵 英記・田村唯史

調査期間 平成25年12月4日～平成26年2月18日（実働14日間）

調査面積 767m²

[本発掘調査]

遺跡調査番号 2013122

調査主体 兵庫県教育委員会

調査担当者 （公財）兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部

調査第1課 鐵 英記・田村唯史

調査期間 平成25年12月4日～平成26年2月26日（実働40日間）

調査面積 1,320m²

第3節 出土品整理の経過

発掘調査終了後、平成26年度から平成30年度までの5ヵ年で出土品整理を実施した。事業は発掘調査と同様に、姫路市からの依頼を受けた兵庫県教育委員会が、(公財)兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部に委託して実施した。

作業は兵庫県立考古博物館及び同魚住分館で実施し、遺物写真撮影及び分析鑑定については専門業者に委託した。

[平成26年度]

水洗い、ネーミングを実施した。

実施期間 平成26年5月1日～平成27年3月31日

事業主体 兵庫県教育委員会

整理担当者 (公財)兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

　　調査第2課 鐵 英記

　　整理保存課 菱田淳子・長濱誠司・岡本一秀

作業担当者 (公財)兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

　　整理保存課 今村直子・藤尾裕子・吉村あけみ・前谷幸次

[平成27年度]

接合・補強、金属器保存処理を実施した。

実施期間 平成27年5月1日～平成28年3月31日

事業主体 兵庫県教育委員会

整理担当者 (公財)兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

　　整理保存課 菱田淳子・岡本一秀

作業担当者 (公財)兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

　　整理保存課 小野潤子・石田典子・佐々木愛

[平成28年度]

実測・拓本、復元、写真撮影、写真整理、図面補正を実施した。

実施期間 平成28年5月1日～平成29年3月31日

事業主体 兵庫県教育委員会

整理担当者 (公財)兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

　　整理保存課 菱田淳子

作業担当者 (公財)兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

　　整理保存課 古谷章子・八木和子・前田陽子・小野潤子・河合たみ

[平成29年度]

トレース、分析・鑑定、木器保存処理を実施した。

実施期間 平成29年5月1日～平成30年3月31日

事業主体 兵庫県教育委員会

整理担当者 (公財) 兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

整理保存課 多賀茂治・菱田淳子・大本朋弥

作業担当者 (公財) 兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

整理保存課 八木和子・大前篤子・東郷加奈子・太田泉穂・児玉昌子

[平成30年度]

レイアウト、印刷を実施し、報告書を刊行した。

実施期間 平成30年5月1日～平成31年3月31日

事業主体 兵庫県教育委員会

整理担当者 (公財) 兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

企画調整課 鐢 英記

整理保存課 多賀茂治・菱田淳子・深江英憲

作業担当者 (公財) 兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

整理保存課 八木和子

第2章 遺跡の位置と環境

神屋町遺跡は兵庫県姫路市神屋町に所在する。姫路市は兵庫県西南部にある人口約53万人の中核都市であり、神屋町は市域南部の中心市街地に位置している。今回の調査地は神屋町の南端にあたり、JR姫路駅の東約600m、JR山陽本線と同播但線の分岐点のすぐ東側である。北西側には姫路市のシンボルである姫路城がそびえ、東側を市川が南流している。現在の海岸線からの距離は約5km、標高は約13mである。

調査地周辺の地形環境については、近接する市之郷遺跡（兵庫県教育委員会2005等）や北条遺跡（兵庫県教育委員会2007）の調査報告書で、歴史的環境についても豆腐町遺跡（兵庫県教育委員会2019等）等で詳細に記述されているので、ここでは神屋町遺跡の理解に必要な周辺の主要遺跡を紹介しながら、土地開発の歴史を略述することにしておく。

神屋町遺跡（1・第2図の遺跡番号、以下同じ）が立地するのは市川右岸の沖積平野である。市川は播磨・但馬・丹波の国境付近を源流とする二級河川であり、神崎郡（現神河町、市川町、福崎町）の谷筋を流れ下って姫路平野に入り、船場川等の支流に分岐する。本流が現在の流路に固定されるまでは、姫路城がある姫山と現市川の間の姫路市街地付近には幾本もの流路があり、その自然堤防上の微高地に東から市之郷遺跡（11）・北条遺跡（10）・豆腐町遺跡（3）・南畠町遺跡（50）など弥生時代から古墳時代に至る集落が形成されていた。

神屋町遺跡もこのような微高地上に形成された集落遺跡のひとつであり、大きくは北条遺跡が乗るのと同じ微高地上に位置している。市之郷遺跡や豆腐町遺跡では弥生時代前期に遡る遺物が出土しており、市川の沖積作用によって形成された低湿地を水田として開発することにより、この地域の弥生時代が始まったことを物語る。

弥生時代を通じて低地の埋積による土地の平坦化が進むのにあわせて、長越遺跡の大溝のような大規模な灌漑水路が弥生時代末から古墳時代に設けられ、新たな耕地が開発される。古墳時代後期には市之郷遺跡での韓式土器の出土が示すように、朝鮮半島からの渡来系の人々が移り住み、新たな集落が形成されるなど、姫路平野への人口の集積が進み、「播磨の中心」が形成される様子がうかがえる。この時期の首

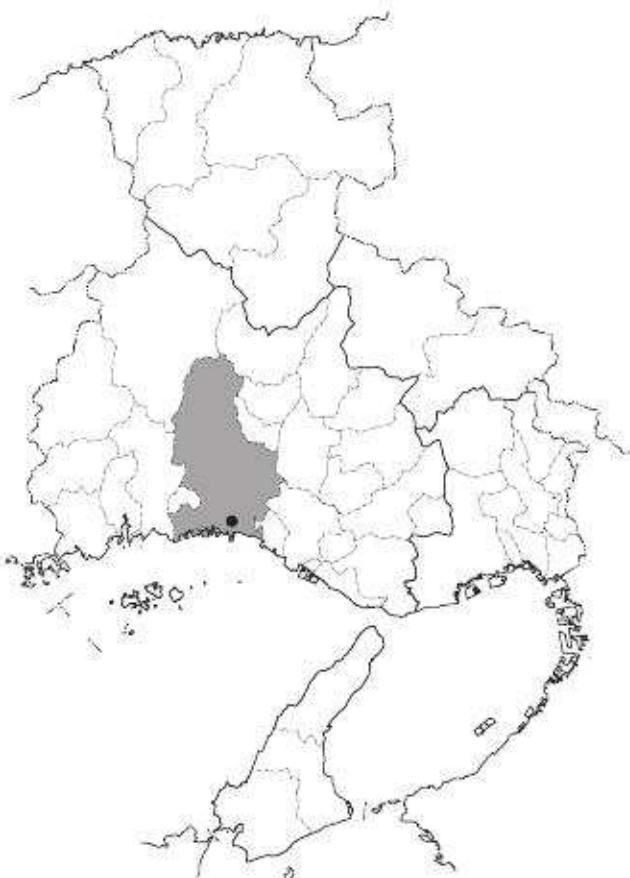
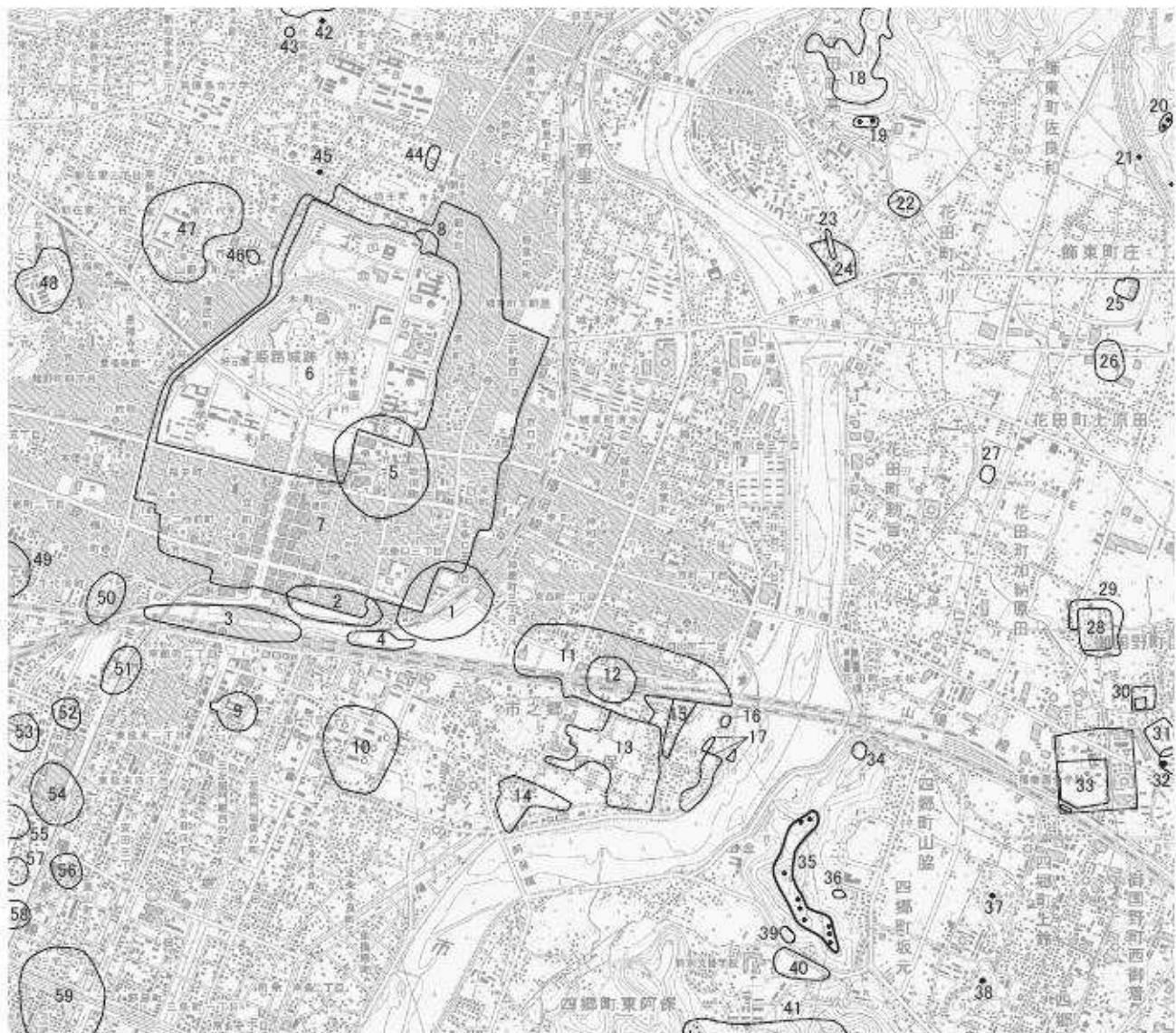


図1 遺跡の位置



NO.	遺跡名	時期	NO.	遺跡名	時期	NO.	遺跡名	時期
1	神屋町遺跡	弥生～平安	21	才ヘラ南麓古墳	古墳	41	阿保百穴群集墳	古墳
2	駅前町遺跡	弥生～近世	22	小川庵寺	奈良	42	東光寺山古墳	古墳
3	豆腐町遺跡	弥生～平安	23	高木遺跡	奈良	43	大歳神社前遺跡	古墳
4	朝日町遺跡	弥生～奈良	24	長谷遺跡	古墳	44	富士才遺跡	弥生
5	本町遺跡	奈良	25	宮ノ浦遺跡	古墳～平安	45	御茶屋町遺跡	弥生
6	姫路城跡	近世	26	上原田廃寺	奈良	46	男山東山燒窯跡	近世
7	姫路城城下町跡	近世	27	小堀方遺跡	古墳	47	八代深田遺跡	弥生
8	野里門下層遺跡	縄文～弥生	28	播磨国分尼寺跡	奈良～平安	48	岩端町遺跡	弥生
9	豊沢遺跡	弥生	29	播磨国分尼寺周辺遺跡	奈良～中世	49	千代田遺跡	縄文～弥生
10	北条遺跡	弥生～古墳	30	山之越古墳	古墳	50	南萩町遺跡	弥生
11	市之郷遺跡	弥生～中世	31	塙塙山古墳	古墳	51	君田遺跡	弥生
12	市之郷廃寺	奈良	32	国分寺台地遺跡	旧石器～弥生	52	村瀬遺跡	弥生
13	阿保遺跡第2地点	弥生～中世	33	播磨国分寺跡	奈良	53	橋詰遺跡	縄文～古墳
14	阿保遺跡第1地点	平安～中世	34	八重鉢山構跡	中世	54	黒表遺跡	弥生～古墳
15	阿保構跡	中世	35	坂元山古墳群	古墳	55	小山遺跡	弥生～古墳
16	市之郷長堤遺跡	平安	36	宮山古墳	古墳	56	浜田遺跡	弥生
17	阿保下長、永河原遺跡	平安～中世	37	上鈴山古墳	古墳	57	古屋敷遺跡	弥生～古墳
18	石積山城跡	中世	38	中鈴山古墳	古墳	58	竹の前遺跡	弥生～古墳
19	石積山古墳群	古墳	39	坂元山南麓遺跡	弥生	59	三宅遺跡	奈良
20	トンノク谷古墳群	古墳	40	坂元山遺跡	古墳			

図2 周辺の遺跡

長墓である壇場山古墳（31）は市川左岸の御国野に築かれるが、モニュメントを市川左岸に配する構造は、後の奈良時代の播磨国府と播磨国分寺（33）・同国分尼寺（28）の関係にも引き継がれる。

古代に入ると、姫路平野の開発は新たな段階へと進む。平城京と太宰府を結ぶ古代官道である山陽道が東西に設けられ、播磨国府が現在の姫路城近辺の本町遺跡（5）を中心とする場所に置かれる。国府域が近世の姫路城城下町と重なるため、国府の詳細な構造の把握は難しいが、姫路駅周辺に広がる豆腐町遺跡からは官衙的な遺構や遺物が出土しており、国府を構成する諸施設が現在の姫路市街地に集積されていたことがうかがえる。また弥生時代以来、集落が営まれてきた市之郷には飛鳥時代に市之郷廃寺（12）が建立され、引き続き地域の拠点として機能していたことがうかがえる。

播磨国府は中世にも小河氏など在庁官人による支配拠点となり、播磨の中心として機能するが、室町時代に赤松氏が播磨守護となると、在庁官人の被官化が進む。15世紀以降、夢前川流域の書写坂本城や置塙城が守護所となり、守護代の小寺氏が市川左岸の御着城を本拠とすることにより市川右岸地域の中心性が失われる。市川右岸地域には小寺氏の重臣（後の黒田氏）が姫路城（6）に置かれる。

市川右岸地域が再び播磨の政治・経済の中心となるのは、羽柴秀吉が姫路城を中国攻めの拠点として整備して以降である。その後、池田輝政が姫路城に入り、1601（慶長6）年から8年間にわたる大改修により、大天守が存在する姫山を中心に内堀・中堀・外堀の三重の堀を巡らせた摺構の縄張りを完成させた。城郭の中心部である内曲輪の周囲に上級武士の屋敷を置く中曲輪を配し、西国街道を中曲輪に沿って屈曲させて城下に取り込んでいる。外曲輪が姫路城城下町（7）であり、町屋や下級武士の宅地が配された。神屋町遺跡の付近は外曲輪南東角の北条門の東側にあたり、城外となっている。江戸時代における土地利用については、これまで詳らかではなかったが、今回の調査の出土遺物から若干の検討材料が得られている。

明治時代になり1888（明治21）年、城下町の南側に山陽鉄道（現在のJR山陽本線）が敷設され姫路駅が設けられ、1894（明治27）年には播但鉄道（現在のJR播但線）が姫路一寺前に開通する。これに伴い姫路駅周辺に機関庫等の施設が整備されるが、当初の機関庫は姫路駅西側の豆腐町遺跡に設けられた。発掘調査によりレンガ積みの初代、コンクリート製の第二代の転車台や、扇形庫などの存在が確認されている。神屋町遺跡周辺は明治時代の地形図では、水田となっており、まだ鉄道関係の施設は無かったようである。この付近に鉄道関係施設が置かれるのは昭和になって機関庫が移転してからである。転車台と扇形庫を備え、車両基地・貨物駅として長年にわたり使用してきたが、姫路駅周辺の高架化に伴い廃止された。

【参考文献】

- 兵庫県教育委員会 2005 『市之郷遺跡－JR山陽本線立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書I－』兵庫県文化財調査報告 第286冊
- 兵庫県教育委員会 2007 『北条遺跡－JR山陽本線立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書II－』兵庫県文化財調査報告 第325冊
- 兵庫県教育委員会 2019 『豆腐町遺跡－姫路駅周辺地区総合整備事業（キャスティ21）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書I－』兵庫県文化財調査報告 第507冊

第3章 調査の成果

第1節 確認調査（図版1・5）

事業予定地内にトレーンチ11個所を設定し、重機により掘削を行った。

掘削深度が2メートルを超えることとなったため、安全確保のため人力掘削は行わず、土層堆積状況の記録を写真撮影のみにとどめ、調査後、姫路市教育委員会の立会を受けて、速やかに埋め戻した。

現地表下2.0mまで重機により掘削を行ったが、近代以前の遺構面に達しなかったため、少しづつ深度を下げていき、耕作面の上面を確認した。

堆積状況はほぼすべてのトレーンチに共通しており、近代以降のものと考えられる2m近い客土層の下で近世耕作土と砂礫層および旧国鉄時代の構造物の基礎を確認した。客土層は大量のコークス滓に汽車土瓶・飲料水ガラス瓶等が含まれ、国鉄時代に大きく攪乱されたと思われる。その下層にあたる近世耕作土と砂礫層の面では、遺構・遺物は検出されなかった。

第2節 本発掘調査（図版2～4、写真図版1～5）

層序

第1層から第3層は現代客土である。第3層のコークス層は本調査区、各確認調査トレーンチにおいて普遍的にみられ、姫路市教育委員会が実施した1995年の調査においても確認されている。

姫路市が調査した際、その層において不発弾が検出され、さらに今回の調査においても、この層から「鐵道局御指定」と書かれたガラス製の飲料瓶や汽車土瓶が出土していることから戦時中から戦後以降に造成された層だと考えられる。

第4層は暗灰黄色の細礫混り細粒砂質シルト層で近代の耕作土層である。第5層はにぶい黄褐色の細礫混り中～細粒砂層からなる耕作土層である。第6層は黒褐色の細粒砂層で地山のブロックを多く含む近代の整地層と考えられる。第6層は東側の巨礫を用いて造営されたと考えられる畦道と関連しており、近代に生産地として利用されてきたことが明らかとなった。第7層は褐色の中～細粒砂層からなる近世以降の耕作土層である。

第8層は暗オリーブ褐色のシルト質細粒砂層で自然堤防を利用して營まれた耕作土層である。

第9層は黒褐色の中～細粒砂層からなる水成層である。第10層は黄灰色の細粒砂を含むシルト層からなる水成層である。第9・10層は越流堆積の各単位であると思われる。第11層は黒褐色の中～細粒砂層の水成層で、細粒砂やシルトの動きは明瞭でないためそれほど速い流れではなかったようにおもわれる。

第12層は褐灰色のシルト層でわずかに細粒砂が混じる。層中より牛、馬などの骨が出土する水成層であるが、上層と同じように土の動きは明瞭ではない。そのため泥や沼地のような場所に動物の骨が上から廃棄されたと考えられる。第13層は灰黄褐色の礫層で自然堤防に沿って堆積がみられる。第14層は暗褐色の細礫を含む中～細粒砂層で下層の自然堤防を利用して造成された畦畔の名残だと考えられる。第15層はオリーブ褐色の細粒砂層で層中に地山ブロックを僅かに含んでいる。第14層との境界は明瞭であるが、第13層、18層との境は不明瞭である。第16層は黒褐色の細粒砂質シルトからなる耕作土層である。第18層は黒褐色の細粒砂混りのシルト層で流路の機能時堆積層の最下層であると思わ

れるが、第14層との境界は不明瞭である。第19層はにぶい黄褐色の細～中礫を含む中粒砂層で下層の自然堤防上に造営された畦畔の名残とみられる。第20層は暗褐色の礫層で調査区の中央から東に向かってなだらかに落ちていく。人頭大からこぶし大の川原石が大半を占める。第18層との境で寛永通宝と熙寧元宝が出土している。第20層の層厚は120cm以上である。遺物は上面のみで、層中からは確認できなかった。

遺構

調査区内で検出された遺構は、調査区の北東部の流路のみである。西側肩部の一部だけの検出であるため、本来の規模は不明であるが、最大検出幅で9m、検出長22m、検出面からの深さは最深部で約1.2mを測る。

流路の肩部からは大型動物の骨が複数のブロックに分かれて検出された。土層堆積状況から、流路の流速はあまり早くなかったと考えられ、投棄された動物遺体がある程度のまとまりを持って、残存していたものと考えられる。

持ち帰った動物遺体を（一社）文化財科学研究センターで同定した結果、ウシとウマの双方が含まれることが判明し、明瞭な解体痕はないという報告を受けた。ただし、頭骨に関しては下顎骨が残存するものの、上半部は残されていなかった。

遺物に関しては、第4章で述べるとおり、近世を中心とした時期の陶磁器類と木製品が出土している。

第4章 出土遺物

第1節 土器（図版6～7・写真図版7～10）

土器はいずれも流路や包含層からの出土であり、明確な遺構に伴うものはない。遺跡の形成時期や継続期間についての情報が得られる資料を選んで図化している。各土器の法量や帰属時期については表2にまとめてある。

流路出土土器

1は伊万里焼の赤絵磁器徳利である。外面に赤色と青色の顔料で文様を描く。2は肥前系の青磁花瓶である。3は唐津焼の灰釉陶器碗である。4は波佐見焼の粗製の白磁皿であり、高台は露胎、底部内面に蛇の目状釉剥ぎを施す。5は肥前の染付碗の底部である。6は初期伊万里の染付磁器瓶の底部である。7は肥前系染付磁器の段重であり、外面に草花文を描く。8は京焼系の灰釉陶器碗である。9～12は唐津焼の灰釉陶器の底部である。9・10は碗、11・12は皿である。

13は唐津焼の褐釉陶器壺である。内面に青海波文が見られることから、粘土紐巻き上げによる成形であることがわかる。14は備前焼の擂鉢である。備前焼IV期のものである。15・16は土師器小皿である。いずれも糸切り底であり、16には漆のような黒色の付着物がある。17は土師器の焙烙である。

包含層出土土器

18は肥前系青磁の香炉である。龍泉窯系青磁の模倣品である。19は青磁の碗である。近代以降のクロム青磁である。20は波佐見焼の粗製の白磁皿である。21は外面に卍と角福文を施す肥前系染付碗である。22～24は波佐見焼のくらわんか手の碗である。23は二重網目文を描く。24はコンニャク印判で文様を付ける。25は肥前系の染付鉢である。26は内面に唐草と花の窓文を配した染付八角鉢である。25・26ともに型打ち技法で作られる。27は波佐見焼の染付皿である。43は施釉陶器の焜炉である。「姫路本家」「彌」の刻印があり、東山焼の弥七焜炉である。44は備前焼の布袋徳利である。

28は備前焼甕の口縁部、29は備前焼の盤である。30は無釉陶器徳利の底部である。31は備前焼擂鉢である。32・33は播磨型の土師器鍋である。34は土師器の焙烙である。35は汽車土瓶の湯呑みである。

16トレーナー出土土器

36は外面に「○はぎ」の文字を書いた施釉陶器の碗である。37は汽車土瓶である。「亀山」の文字がある。38は施釉陶器の徳利である。

17トレーナー出土土器

39は白磁の碗である。40・41は汽車土瓶の湯呑である。42は施釉陶器の湯呑蓋である。

第2節 石製品（図版8、写真図版10）

石製品は2点の砥石がある。

S 1は表面と両側面の3面を使用している。短辺は面取りを行っている。緑灰色。側面に縦方向の摩擦痕が残る。残存重量は90.5 g。

S 2は極めて薄く剥離している。表裏面と側面の3面に使用痕が残る。短辺は面取りと研磨を行っている。灰白色。残存重量は38.3 g。

第3節 金属製品（図版8、写真図版10・13）

金属製品は煙管M1、釘M2・3、銅錢M4・5を図化している。

M1は煙管の一部である。筒状で継ぎ目が見られるが、雁首か吸口かは不明である。

M2・M3は釘である。M2は両端を欠く。M3は「くの字状」に曲げた頭部が残る。いずれも断面が方形で、M3の方がわずかに細い。

M4は北宋錢の熙寧元寶、M5は寛永通宝である。M4は孔のまわりの帶状の区画はみられない。

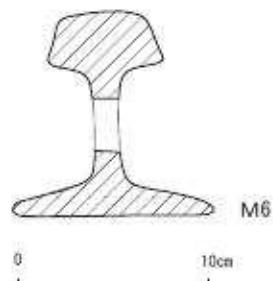


図3 レール断面

M6は平底レールである。頭部の幅6.1cm、底部の幅10.7cm、全体の高さ10.75cm。残存長は90.7cm。重さは25.8kg。腹部に計2.8～2.9cmの円孔が2個並ぶ。また、腹部側面に「NO60B 190」の刻印があり、1ヤード(0.91m)あたりの重さは60ポンド(約30kg)。年代は190で切断されており、1900年代初頭、官営八幡製鉄所(福岡県)で製造されたものであることを示している。明治38年から八幡製鉄所で製造開始された37kg/mではなく、30kg/mに相当する規格のものか。

第4節 ガラス製品（写真図版10）

いずれも確認調査トレンチから出土したものである。45のみ16トレンチ、その他は17トレンチである。45～48はガラス瓶である。45は牛乳瓶であり、「正量一合」「全乳」「米原」「加藤商店」の文字がある。46も牛乳瓶である。「均質」「コーヒー牛乳」「登録商標」「TO & CO」の文字と、三つ葉の中にMとHを組み合わせた文字を配した商標がある。MHは「ホモ」の略であり、ホモ(均質)牛乳を示すものである。47も46と同じ商標がある牛乳瓶であり、「均質牛乳」「登録商標」「鐵道専用」の文字がある。48は汽車茶瓶であり、肩部の2箇所に持ち手を付ける凹みがある。「鉄道局御指定」「御茶」「富岡式茶瓶製造元」「大日本麥酒株式會社」の文字がある。大日本麥酒は現在のアサヒビール・サッポロビールの前身であり、瓶の製造も行っていたようである。49～51は汽車茶瓶の蓋である。いずれも大正～昭和期のものである。

第5節 木製品（図版9～11、写真図版11～12）

旧河道より、多くの木器が出土しているが、W1～W49までを図化した。

W1～W12は漆器の椀である。底部は高台付近から丸みを持って立ち上がるタイプには比較的高い高台のものが多い。W1・W5・W10・W12は高台内側の底部にかなり厚みがある。内外面とも朱塗りのものが多いが、漆膜が剥落により失われているものも多い。また黒塗りの中には褐色に近い色を呈するものもある。W7は内面が朱塗りで、外面は黒塗りの上に松か雲を簡略化したような文様と唐草文を鈍い朱色の漆で描いている。W8・9は底面が高台取り付け部から外にほぼ水平に広がった後、屈曲して口縁が直立する外面に稜があるタイプである。いずれも底面の厚さは薄く、高台も低い。W8は杯部の上から1/3程度の高さに断面三角形の突線がめぐる。W10の底面の高台内側には墨書きらしきものがみられる。

W13・14は漆器の蓋で、内外とも朱塗りである。

W15は組み合わせて方形の箱形の容器になる部材で、短辺は両方とも三角形に面取りされている。

長辺の片側は綴じるための小孔がいくつか空けられており、もう一辺は両端を長方形に切り取って全体の形状は凸字形となっている。

W16は長辺の一方の両端を三角形に切り欠く材である。現代の神具で「桧膳」「脚付き折敷」と呼ばれる折敷に脚をつけた膳の脚にあたるものである。

W17～23は板状の材である。W17～W19はやや厚めで小さい孔を穿ち、他の部材と組み合わせ使用されたと考えられるものである。W21・W23は極めて薄い。

W25は小型の卒塔婆である。文字は判読できない。

W26は両面に、W27は片面に文字の書かれた薄板である。いずれも文字は判読不能である。

W28は小型の円筒形の材の側面に3条の浅いU字状の溝を斜めに彫ってらせん状にしたネジ状の用途不明品である。これを覆っていた薄板状の筒であるW29は、らせんに沿うように凹凸が残っていた。現状では縦に3つにきれいに裂けているが、繊維に沿って割れたものか。樹種同定の結果によれば、W28は弥生時代の農耕具にも使用される堅牢なコナラ属アカガシ亜属で作られており、W29はタケ亜科である。

表1 樹種同定結果一覧表

報告番号	実測番号	器種	結果(学名/和名)	
W1	木12	漆椀	<i>Fagus</i>	ブナ属
W2	木02	漆椀	<i>Fagus</i>	ブナ属
W7	木52	漆椀	<i>Zelkova serrata</i> Makino	ケヤキ
W8	木11	漆椀	<i>Aesculus turbinata</i> Blume	トチノキ
W9	木13	漆椀	<i>Fraxinus</i>	トネリコ属
W13	木45	漆椀 蓋	<i>Zelkova serrata</i> Makino	ケヤキ
W15	木68	箱材	<i>Thujopsis</i>	アスナロ属
W16	木81	容器の脚	<i>Thujopsis</i>	アスナロ属
W17	木80	部材	<i>Thujopsis</i>	アスナロ属
W19	木87	部材	<i>Thujopsis</i>	アスナロ属
W25	木43	卒塔婆	<i>Thujopsis</i>	アスナロ属
W26	木42	木札	<i>Thujopsis</i>	アスナロ属
W27	木09	木札	<i>Thujopsis</i>	アスナロ属
W28	木71-1	ネジ状用途不明品	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
W29	木71-2	外筒	<i>Bambusoideae</i>	タケ亜科
W30	木59	漆器 紣子	<i>Fagus</i>	ブナ属
W33	木69	下駄	<i>Thujopsis</i>	アスナロ属
W34	木78	下駄の歯	<i>Thujopsis</i>	アスナロ属
W35	木77	部材	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
W36	木20	曲物 底板	<i>Abies</i>	モミ属
W37	木40	曲物 底板	<i>Abies</i>	モミ属
W39	木63	曲物 底板	<i>Thujopsis</i>	アスナロ属
W41	木18	曲物 底板	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
W44	木35	曲物 底板	<i>Thujopsis</i>	アスナロ属
W46	木64	用途不明品	<i>Thujopsis</i>	アスナロ属
W47	木70	鞘	<i>Thujopsis</i>	アスナロ属

W30は黒色の漆塗りの杓子である。すぐう部分の形状はハマグリ形で、外面は木工仕上げでいう「亀甲なぐり」のように面取り的に粗く仕上げたような加工痕を残しているが、内面はなめらかに仕上げられている。飛騨の民具「有道杓子」の汁用杓子の外形と似た形状である。

W31・32は刷毛の持ち手である。よく似ているが別個体である。絵の具やのり用のものか。

W33は方形の下駄の前孔に近い部分で、先端に平行に割れている。表面には使用による足指の形が残っており、裏面はつま先の摩減がみられる。W34は差し歯式の下駄の歯である。

W35はおそらく十文字に組み合わせて用いる部材で、中央に孔が穿たれている。W36～42は直径6～12cmの円盤状の材で、小型の曲物の底と思われる。特に小さいものは柄杓の底の可能性がある。

W43～45は直径20cm前後のやや大型の円盤状の材で、これも曲物もしくは結桶の底板である。W43は2個セットの継ぎ孔が2箇所確認でき、蓋の可能性がある。W44は数枚の板を組み合わせたもので、側面に接合のための釘孔が観察できる。W45は四角い枠内に文字が刻まれていたようであるが、崩れて判読不能である。

W46も底板状の円板の一部のような形状を呈するが、細く尖った部分の側面に切れ込みが入っており、用途は不明である。

W47は2枚合わせの鞘の一部である。かまぼこ状の膨らみをもつ外面は縦方向の長い単位で面取り的に削られている。

W48・49は細い杭で、先端に近い部分である。

なお、木製品のうちの26点について一般社団法人 文化財科学センターに依頼して、樹種同定を行ったところ、判明した樹種はアスナロ属13点がもっとも多く、スギ2点・モミ属2点と合わせ、針葉樹の比率が高くおよそ2/3を占める。アスナロは耐久性・保存性が高く、水湿にはヒノキより耐える材であり、下駄に使用されているばかりでなく、箱状の容器や底板もアスナロが多い。漆器は広葉樹のブナ属・ケヤキ・トチノキ・トネリコが同定された。ブナ・ケヤキは縄文時代から現代まで伝統的にろくろ挽きの素材である木地に用いられる材である。

表2 土器一覧表

報告番号	種別	器種	産地	時期	法量(cm)			備考
					口径	器高	底径	
1	赤絵磁器	徳利	伊万里	18世紀前半	(3.0)	(5.0)		
2	青磁	花瓶	肥前	18世紀前半	-	(7.6)	(5.4)	
3	灰釉陶器	碗	唐津	17世紀前半	-	(3.2)	5.3	
4	白磁	皿	波佐見	18世紀前半	(12.9)	3.0	4.4	粗製
5	染付磁器	碗	肥前	18世紀前半	-	(5.6)	4.35	
6	染付磁器	瓶	肥前	17世紀前半	-	(3.15)	4.7	初期伊万里
7	染付磁器	段重	肥前	19世紀前半	(14.3)	3.6	(9.9)	
8	灰釉陶器	碗		19世紀前半	(9.6)	6.7	4.5	京焼系
9	灰釉陶器	碗	唐津	17世紀前半	(10.1)	3.4	3.9	
10	灰釉陶器	碗	唐津	17世紀前半	-	(1.8)	4.25	
11	施釉陶器	皿	唐津	17世紀前半	-	(1.8)	4.0	高台切り放し、砂目
12	施釉陶器	皿	唐津	17世紀前半	-	(2.3)	4.95	砂目
13	褐釉陶器	壺	唐津	17世紀前半	(18.8)	23.0	(13.5)	内面青海波文、粘土紐巻き上げ
14	無釉陶器	擂鉢	備前	15世紀	(24.65)	(6.5)	-	備前IV期
15	土師器	小皿		17世紀前半	(8.2)	1.3	(6.1)	糸切り底
16	土師器	小皿		17世紀前半	10.45	1.9	7.55	糸切り底、漆?付着
17	土師器	焰烙		17世紀前半	(26.25)	(7.1)	-	タタキ目
18	青磁	香炉	肥前	18世紀前半	(9.6)	(4.2)	-	龍泉窯系青磁の模倣品
19	青磁	碗		19世紀後半以降	7.4	3.8	2.6	クロム青磁
20	白磁	皿	波佐見	18世紀前半	9.8	2.7	3.2	粗製品
21	染付磁器	碗	肥前	19世紀前半	(11.4)	5.8	4.1	角福文
22	染付磁器	碗	波佐見	18世紀後半	(10.4)	5.45	3.8	くらわんか手
23	染付磁器	碗	波佐見	18世紀前半	(9.9)	5.25	4.25	二重網目文
24	染付磁器	碗	波佐見	18世紀前半	(12.1)	6.2	4.4	コンニャク印判
25	染付磁器	鉢	肥前	19世紀前半	(13.35)	(4.45)	-	型打ち技法
26	染付磁器	鉢	肥前	19世紀前半	(13.6)	6.7	5.6	型打ち技法、八角、窓繪
27	染付磁器	皿	波佐見	18世紀後半	(18.9)	3.25	(12.25)	くらわんか手、芭文
28	無釉陶器	甕	備前	15世紀	(34.3)	(5.1)	-	備前IV期
29	無釉陶器	盤	備前	16世紀後半	(29.1)	3.4	(17.3)	
30	無釉陶器	徳利			-	(10.9)	(8.2)	
31	無釉陶器	擂鉢	備前	16世紀後半～17世紀前半	(30.2)	12.4	(10.8)	備前V期
32	土師器	鍋		15世紀後半～16世紀前半	(16.3)	(3.1)	-	播磨型鍋
33	土師器	鍋		15世紀後半～16世紀前半	(18.6)	(6.2)	-	播磨型鍋
34	土師器	焰烙		18世紀前半	(24.4)	(6.4)	-	
35	施釉陶器	汽車土瓶湯呑		明治以降	5.95	4.4	3.15	
36	施釉陶器	碗		明治以降	(13.5)	5.3	5.2	
37	施釉陶器	汽車土瓶		明治以降	(8.35)	7.2	7.15	
38	施釉陶器	徳利		明治以降	2.85	13.3	6.9	
39	白磁	碗		明治以降	9.7	7.5	5.1	
40	施釉陶器	汽車土瓶湯呑		明治以降	5.9	3.6	2.7	
41	施釉陶器	汽車土瓶湯呑		明治以降	5.3	3.1	2.3	
42	施釉陶器	湯呑蓋		19世紀中頃	4.7	0.9	-	
43	施釉陶器	焜炉	東山	19世紀前半～中頃				「姫路本家」「彌」刻印、彌七焜炉
44	施釉陶器	徳利	備前	18世紀前半				布袋徳利

表3 石製品一覧表

報告番号	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	備考
			長さ	幅	厚み		
S1	石器	砥石	6.3	4.15	3.0	90.5	
S2	石器	砥石	10.7	3.9	0.5	38.3	

表4 金属製品一覧表

報告番号	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	備考
			長さ	幅	厚み		
M1	銅製品	煙管	2.55	0.75	0.1	1.3	
M2	鉄器	釘	7.1	0.5	0.45	1.6	
M3	鉄器	釘	4.6	0.4	0.4	1.2	
M4	銅製品	錢	2.3	2.3	0.1	3.5	熙寧元宝
M5	銅製品	錢	2.45	2.45	0.15	2.9	寛永通宝

表5 木製品一覧表

報告番号	種別	器種	法量(cm)			残存		
			口径	器高	底径	口縁	底	他
W01	木製品	漆椀		(7.8)	6.0		1/2	体部1/3
W02	木製品	漆椀		(8.0)				2/3
W03	木製品	漆椀		(3.7)				1/4
W04	木製品	漆椀		(5.8)				2/3
W05	木製品	漆椀		(4.9)				1/2
W06	木製品	漆椀		(2.9)				1/2
W07	木製品	漆椀		(3.4)				体部1/3
W08	木製品	漆椀	(12.4)	5.0	5.8			4/5
W09	木製品	漆椀		(4.2)	(5.0)		1/2	体部1/8+1/8
W10	木製品	漆椀		(2.2)				1/2
W11	木製品	漆椀 底部		(1.9)	(7.6)		1/3	
W12	木製品	漆椀		(1.7)			1/2弱	
W13	木製品	漆椀 蓋	(11.6)	(3.6)				1/2弱
W14	木製品	漆椀 蓋	(12.0)	(2.1)		1/10		
			長さ	幅	厚み			
W15	木製品	箱材?	24.8	3.15	0.9			
W16	木製品	容器の脚?	19.5	(5.0)	0.8			?
W17	木製品	部材	13.6	(5.2)	1.3			3方イキ
W18	木製品	板(有孔)	(9.4)	4.35	0.9			完形?
W19	木製品	部材	13.5	(2.3)	1.1			?
W20	木製品	加工材	6.6	2.1	0.55			
W21	木製品	薄板	(10.2)	(6.3)	0.25			?
W22	木製品	木札?	(7.5)	4.7	0.5			下半欠?
W23	木製品	薄板	(9.5)	(5.3)	0.2			?
W24	木製品	板	(13.9)	(2.8)	0.6			?
W25	木製品	卒塔婆	(10.9)	(1.8)	0.25			?
W26	木製品	木札	13.0	2.0	0.4			2/3?
W27	木製品	木札	(10.3)	3.9	0.25			下半欠
W28	木製品	ネジ状の人工物	5.2	2.2	2.0			完形?
W29	木製品	人工物	5.25	(6.4)	1.5			完形?
W30	木製品	漆器 杓子	(9.7)	(8.8)	0.6			2/3
W31	木製品	刷毛	15.15	(5.4)	1.0			1/2
W32	木製品	刷毛	(8.1)	(4.75)	0.6			2/5?
W33	木製品	下駄	(5.2)	9.0	1.45			1/4
W34	木製品	下駄の歯	7.3	(6.1)	1.8			1/3
W35	木製品	部材	11.5	4.7	1.5			?
W36	木製品	曲物 底板	5.7	5.9	0.7			完形
W37	木製品	曲物 底板	8.8	8.6	0.4			5/6
W38	木製品	曲物 底板	(8.1)	(4.5)	0.7			1/2弱
W39	木製品	結桶?	10.9	(7.6)	0.8			2/3
W40	木製品	曲物 底板	11.75	(5.3)	0.5			1/2
W41	木製品	曲物 底板	(11.5)	(4.2)	0.7			1/3
W42	木製品	曲物 底板	(11.5)	(4.5)	0.6			2/5
W43	木製品	曲物 蓋?	(21.2)	(7.95)	0.8			1/3
W44	木製品	曲物 底板	18.2	(7.3)	1.6			1/4
W45	木製品	曲物 底板	(20.1)	(4.5)	1.5			1/5
W46	木製品	不明品	17.6	(3.4)	1.3			
W47	木製品	鞘	24.5	3.6	1~1.3			片面のみ
W48	木製品	棒材	(19.6)	3.2	2.9			?
W49	木製品	杭?	(15.85)	3.2	3.25			下半のみ

第5章 自然科学分析（骨・貝同定）

一般社団法人 文化財科学研究センター

1. はじめに

日本の国土は火山灰性の酸性土壌に広く覆われ、動物遺存体の保存状態には恵まれないのが一般的である。そのため動物遺存体が出土するのは貝塚、石灰岩地帯の洞穴や岩陰などが代表的で、近年では湿地環境の遺跡や遺構から多くの動物遺存体が報告されている。また、歴史時代の遺跡の発掘調査が増加し、近世都市における動物利用についても明らかにされつつある。

2. 試料（写真図版14）

試料は、第2ブロックの旧流路の下層から出土した近世と推定される動物遺存体6点である。

3. 方法

試料は、肉眼で観察し、現生骨格標本と形態的特徴を比較して種類を同定した。また、計測は Driesch(1976)に倣って、デジタルノギスを使用して少数第2位を四捨五入した値を示した。

4. 結果と考察

すべて同定したのは哺乳類であり、ウシ (*Bos taurus*) が5点、ウマ (*Equus caballus*) が1点である。ウシは同一個体の左右の下顎骨、肩甲骨（左）、大腿骨（左）、脛骨（左）が出土している。脛骨は最大長（GL）337.3mmを測り、体高120～125cmと推定され（注）、日本在来の口之島牛に相当する大きさである。ウマは下顎骨（左）が1点のみ出土しており、日本在来の御崎馬などの中型馬に相当する大きさである。いずれも散乱した状態で出土していることから、解体されたのちに流路に投棄された可能性もあるが、明瞭な解体痕はみられず、埋没過程で散乱した可能性もある。

5. まとめ

出土した試料は哺乳類のウシ、ウマであり、それぞれ日本在来の牛馬の大きさに相当するものである。散乱状態での出土であり、斃牛馬処理の痕跡である可能性もあるが、明瞭な解体痕はみられないため、今回の試料のみでは、どのような状況で流路に廃棄されたものか詳細は定かではない。しかし、地方における近世の動物利用の一端を示す意義深い試料であり、今後の近隣調査による事例の増加により、さらなる詳細の検討が期待される。

注

西中川駿編（1991）による体高推定式から算出した。

参考文献

西中川駿編1991『古代遺跡出土骨から見たわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』平成2年度文部省科学研究費補助金（一般研究B）研究成果報告

Driesch, Angela von den 1976. *A GUIDE TO THE MEASUREMENT OF ANIMAL BONES FROM ARCHAEOLOGICAL SITES* Peabody Museum of archaeology and Ethnology Harvard University

表6 神屋町遺跡(第2ブロック旧流路)出土の動物遺存体
同定結果

試料番号	層位	小分類	部位	左右	計測
サンプル1	下層	ウシ	大腿骨	左	GLC340.3, Bd97.4
サンプル2	下層	ウシ	脛骨	左	GL337.3, Bd64.4
サンプル3	下層	ウマ	下顎骨	左	表2・3参照
サンプル4	下層	ウシ	下顎骨	左	表2・3参照
サンプル5	下層	ウシ	肩甲骨	左	SLC51.3, CLP67.8, LG55.2, BG46.4
サンプル6	下層	ウシ	下顎骨	右	表2・3参照

表7 ウマ・ウシ臼歯計測値(mm)

サンプル3

ウマ(左)	P2	P3	P4	M1	M2	M3
歯冠長	35.6	29.2	26.5	24.5	24.4	28.2
歯冠幅	13.7	15.0	16.8	12.8	12.2	11.1

サンプル4

ウシ(左)	P2	P3	P4	M1	M2	M3
歯冠長	12.2	16.1	16.1	22.4	25.52	38.3
歯冠幅	9.4	12.2	12.7	16.9	17.7	15.8
咬耗			g	m	k	k

サンプル6

ウシ(右)	P2	P3	P4	M1	M2	M3
歯冠長	11.9	16.7	20.3	20.8	25.7	37.8
歯冠幅	9.0	12.1	13.9	16.8	17.1	16.4

表8 ウシ・ウマの下顎骨
計測値(mm)

番号	ウマ(左)	ウシ(左)	ウシ(右)
1			
2			
3	119.41		
4			
5	289.4		
6	170.1		
6a	159.7		
7	76.2	135.8	141.6
8	93.3	90.3	89.2
9		50.2	74.0
10			
11			79.94
12			
13			133.59
14			186.47
15a		72.71	70.8
15b		49.92	59.7
15c		37.1	39.5
18			
19			
20	21.8		
21			
22a	76.2		
22b	75.9		
22c	51.03		

計測番号は、Driesch(1976)に対応

第6章 まとめ

1995年に実施された姫路市教育委員会による発掘調査の成果から、事業地内において遺跡の中心に近い、事業地の北西に調査区を設定した。しかし、遺構の残存状況は予想以上に悪く、現地表下3mまで建物基礎やコークス層等の旧国鉄の時期の削平・攪乱がみられ、調査区の西側においては地山面にまで達していた。

戦前から戦時中のものと思われるコークス層直下には、旧耕作土が一部に残されており、旧国鉄が操車場や駅舎を建造する直前まで田畠が営まれていたことがわかった。

調査区の中央から東側において、旧耕土により埋没した近世から近代にかけての流路を検出した以外は顕著な遺構は検出されなかった。流路の埋土からは漆器椀や曲物、刀の鞘、刷毛などの木製品が多く出土した。流路の肩部からは獸骨が廃棄されたような状況で数個体分が出土した。第5章でふれたように、ウマとウシの成体であり、顕著な解体痕跡はないとの報告であった。この地点は城下町には含まれず、外京口門の東で西国街道（山陽道）との接点にあたるため、弊牛馬が放棄された可能性もある。ただし、頭部については下顎骨のみが検出されており、脳漿が取り出されている可能性も残されている。

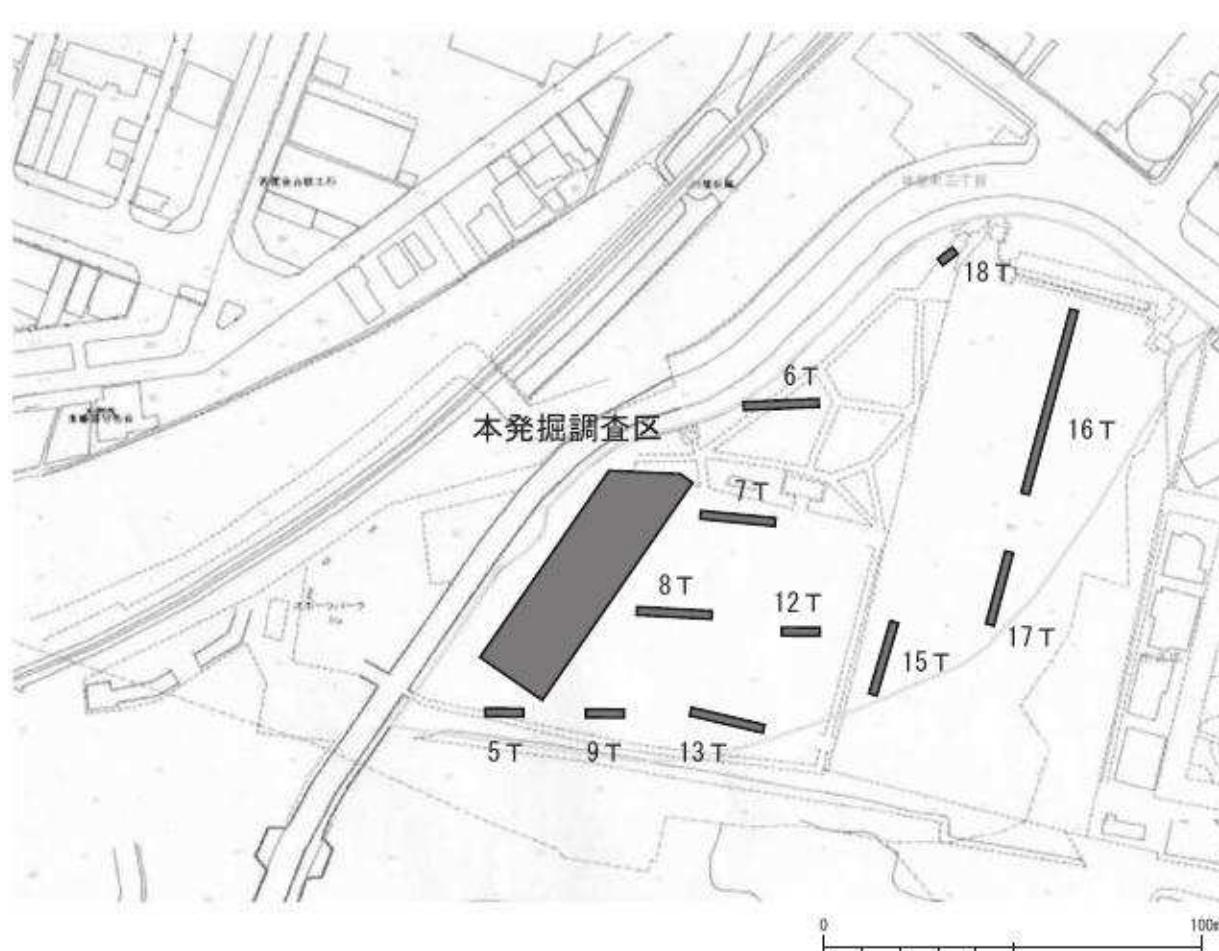
また部分的に実施した下層確認により流路の底面から少なくとも1.2m下まで河川堆積がみられ、湧水のため未確認であるが、さらに下位まで河川堆積が分布するとみられる。また調査区内の右岸は自然堤防上に堆積した疊層であることも確認した。

また、調査区の中央より南側は建物基礎などの近世以降の攪乱がベース面付近にまで及び、近世以前の遺構面は確認できなかった。

報告書抄録

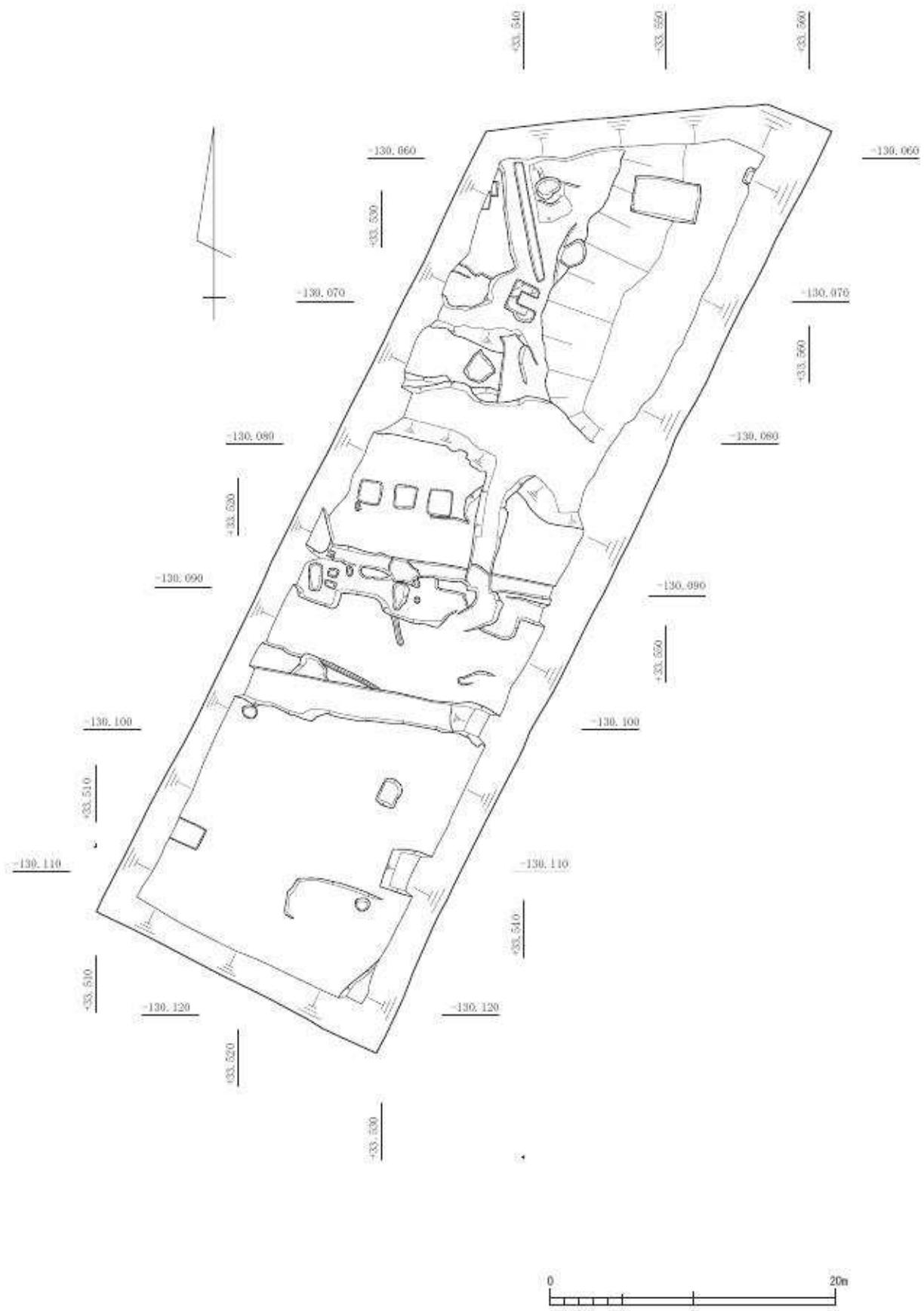
ふりがな	かみやちょういせき							
書名	神屋町遺跡							
副書名	姫路駅周辺地区総合整備事業（キャスティ21）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第508冊							
編著者名	多賀茂治 鐵 英記 菱田淳子							
編集機関	公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部							
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号（兵庫県立考古博物館内）TEL079-437-5561							
発行機関	兵庫県教育委員会							
所在地	〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号 TEL078-362-3784							
発行年月日	平成31（2019）年3月25日							
資料保管機関	兵庫県立考古博物館							
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号 TEL079-437-5589							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間 (遺跡調査番号)	調査面積 (m ²)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
神屋町遺跡	兵庫県 姫路市 神屋町	28201	20461	34°49'36"	134°42'02"	平成25年12月4日～ 平成26年2月26日 (2013122・2013123)	2,087m ²	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
神屋町遺跡	集落跡	室町時代	包含層		陶磁器			
		江戸時代	旧河道		陶磁器、土師器、木製品、動物遺体			
近代以降		姫路機関区		レール、汽車土瓶、牛乳瓶				
要約	姫路城城下町の南東に接する場所であり、近接地における調査成果から弥生時代以降の遺構の存在が予想されたが、姫路機関区の施設整備に伴い大規模な攪乱を受けていることが明らかになった。本発掘調査を実施した部分で室町時代～近代の遺物を含む旧河道を検出している。							

図 版

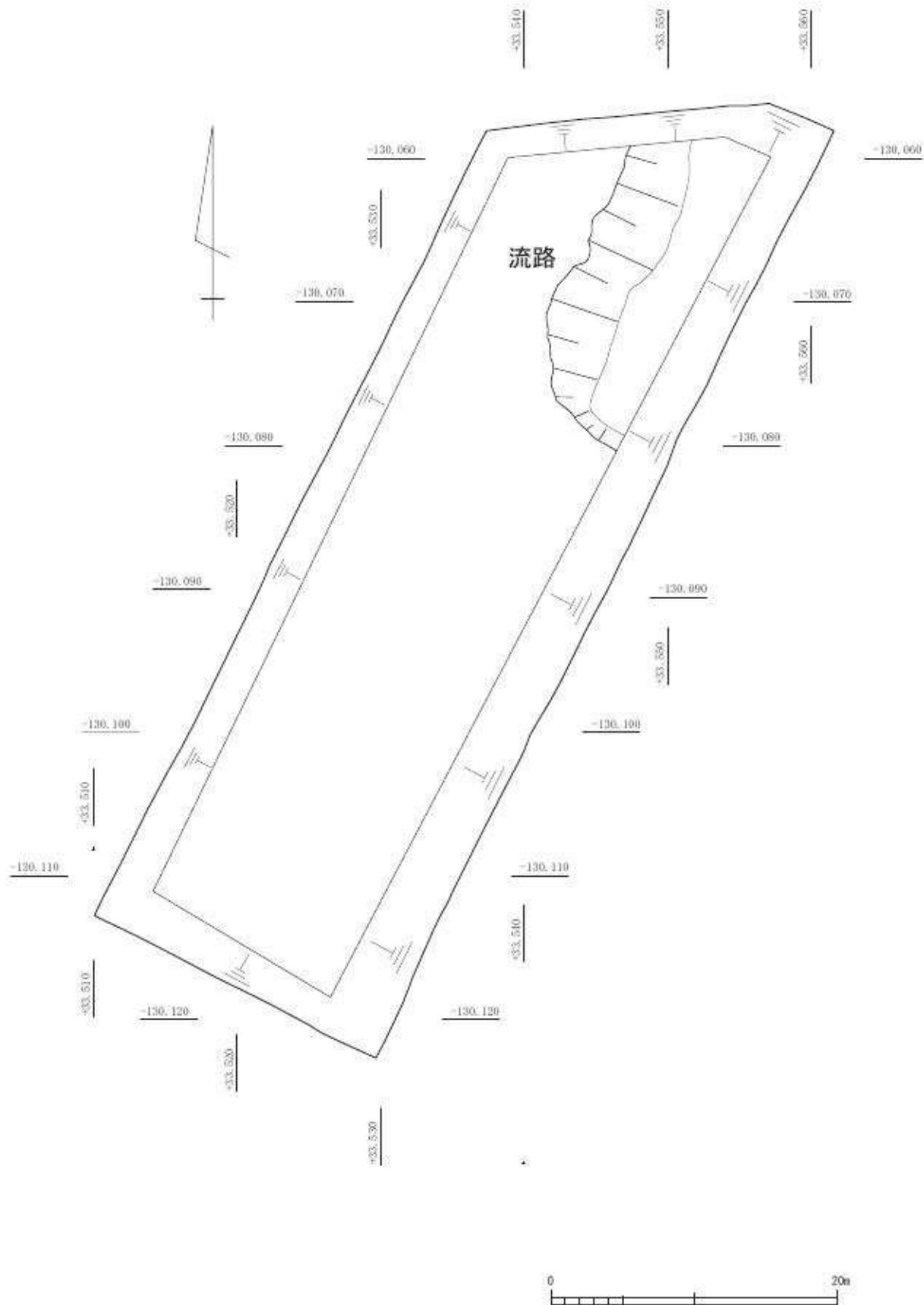


調査範囲図 (1/2,000)

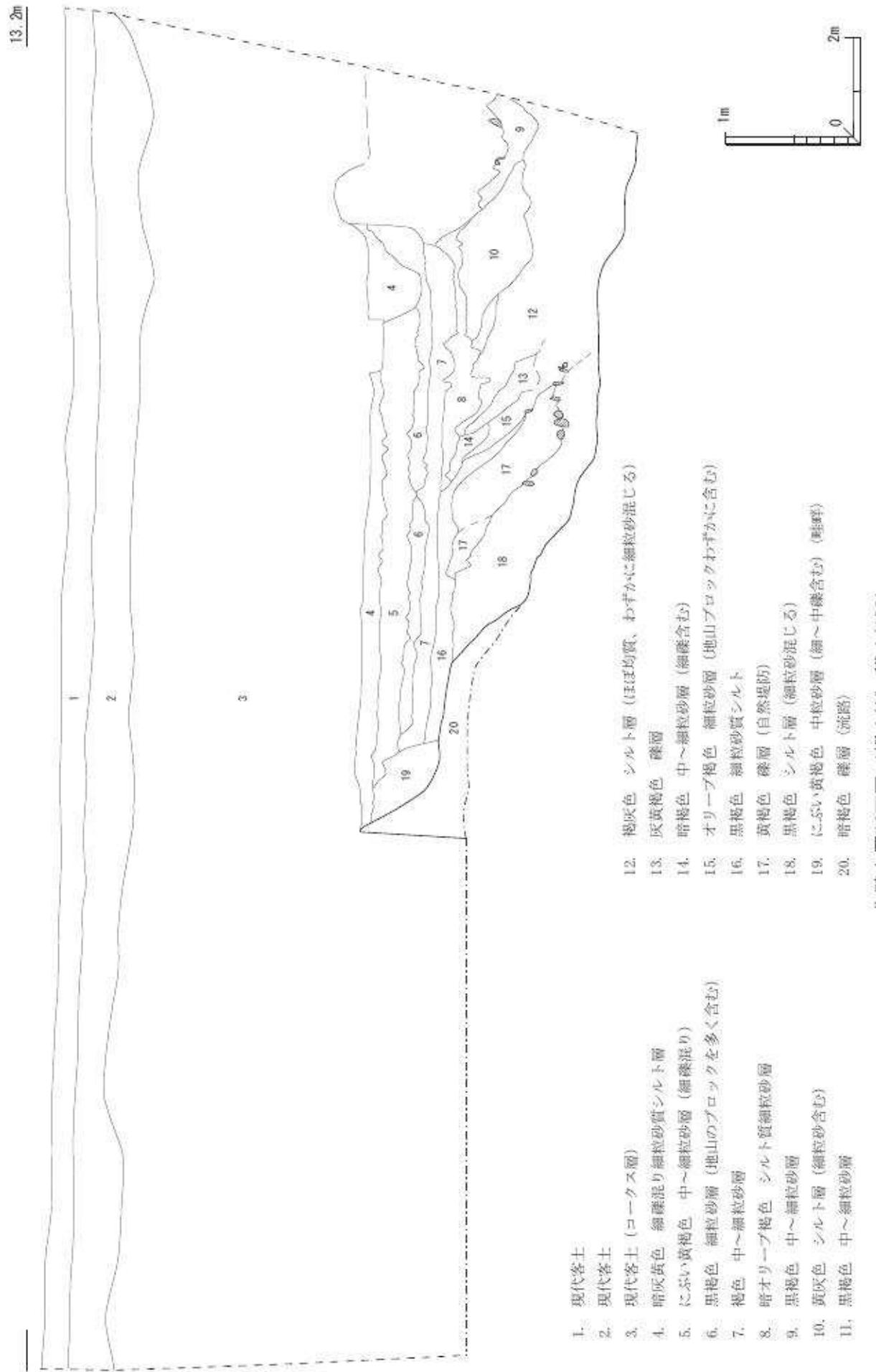
図版 2

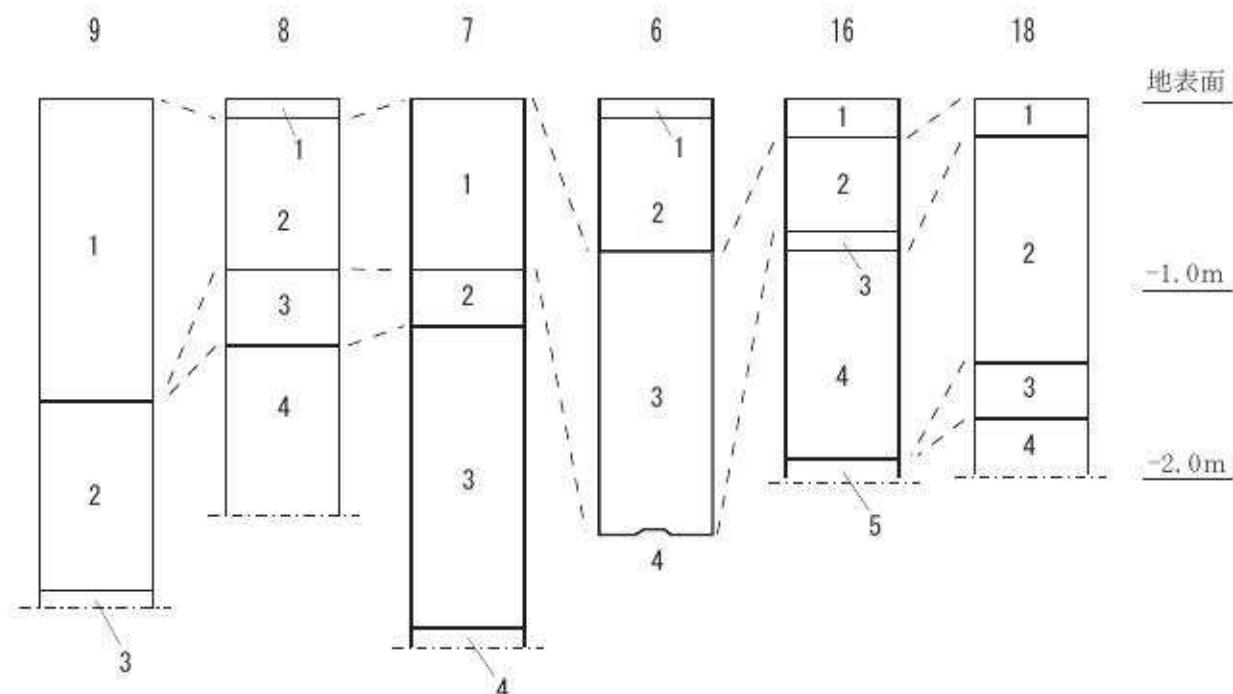


調査区全体図 (1/400)



図版 4





9 トレンチ

1. 黒褐色客土
2. コークス層
3. 黒褐色近世耕土

8 トレンチ

1. 真砂土
2. 黒褐色客土
3. 真砂土
4. コークス

7 トレンチ

1. 黒褐色客土
2. 真砂土
3. コークス層
4. 黒褐色近世耕土

6 トレンチ

1. 真砂土
2. 黒色客土
3. 黑褐色客土
4. 駐舎基礎

16 トレンチ

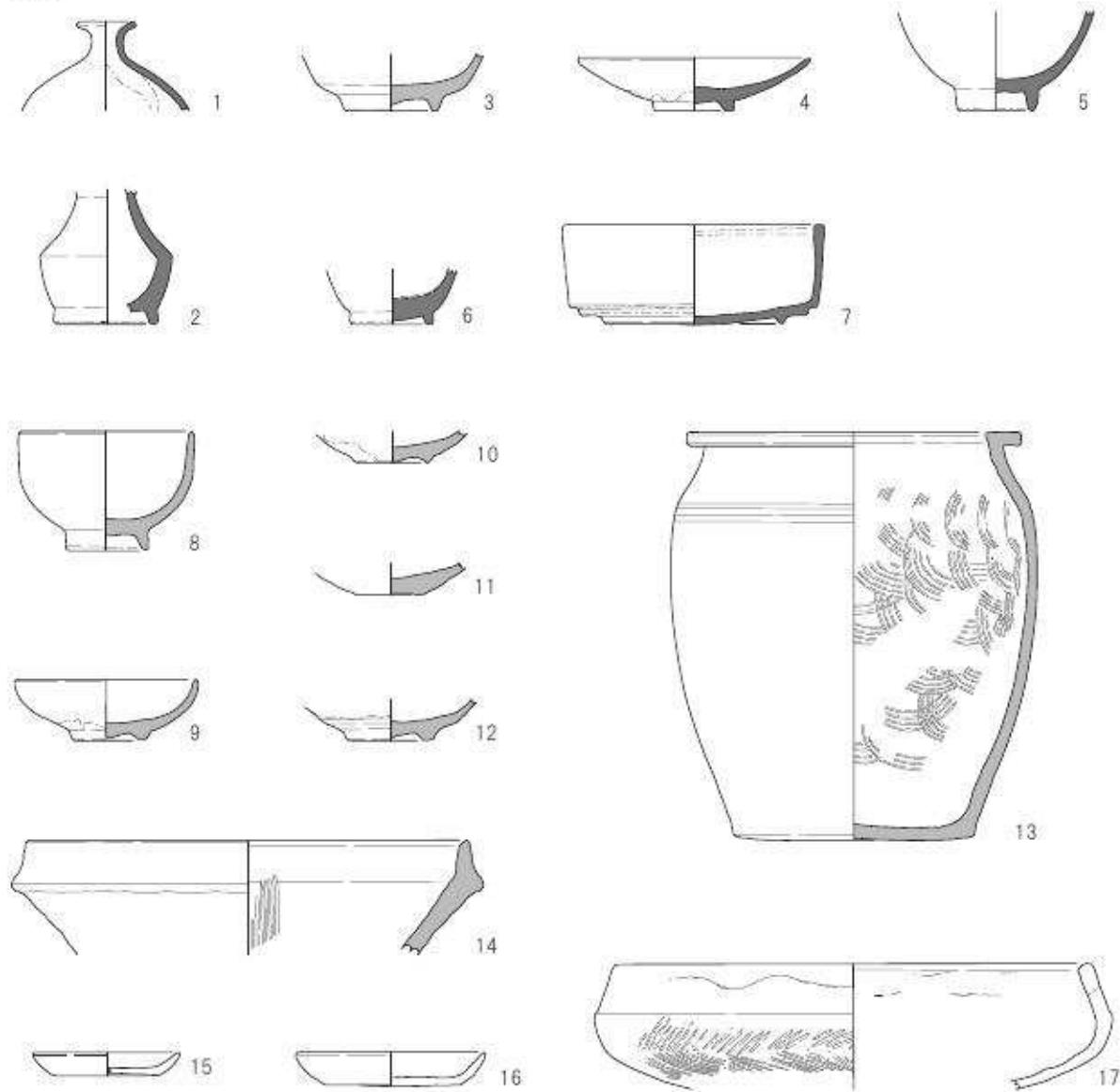
1. 碎石層
2. 黑褐色客土
3. 真砂土
4. コークス層
5. 褐色近世耕土

18 トレンチ

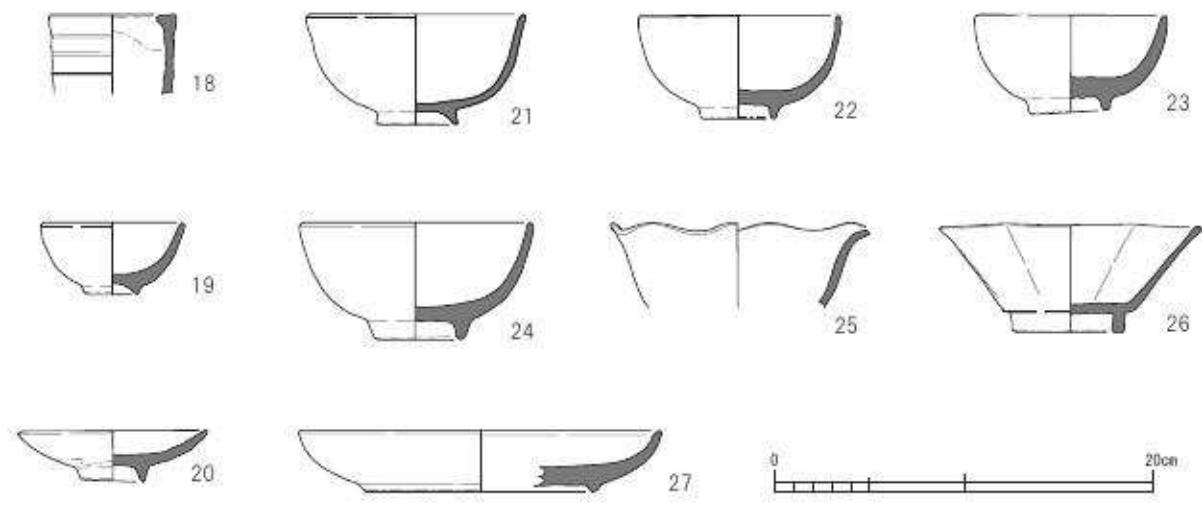
1. 黒褐色客土
2. コークス層
3. 黑褐色近世耕土
4. 褐色近世耕土

図版 6

流路

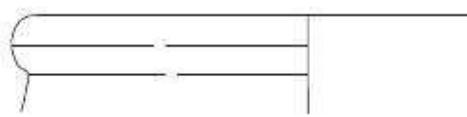


包含層

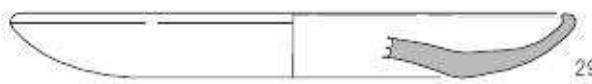


土器 1 (1 ~ 27)

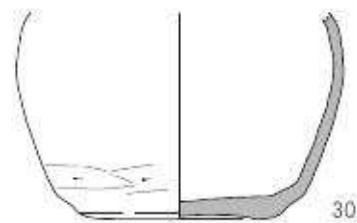
包含層



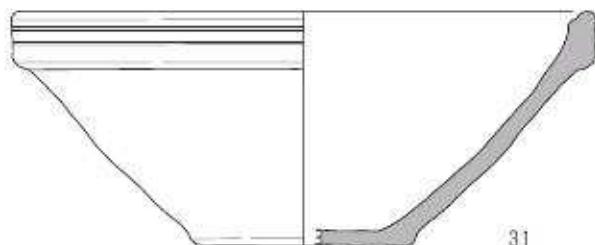
28



29



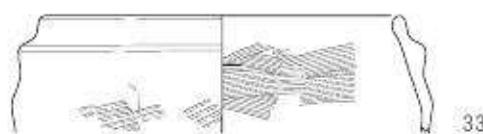
30



31



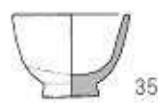
32



33



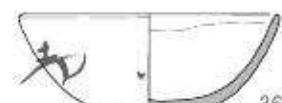
34



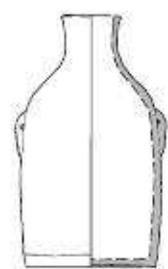
35



36



36



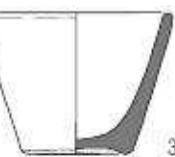
38



山

37

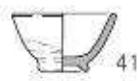
16 トレンチ



39



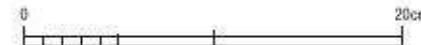
40



41



42

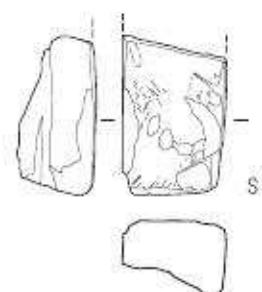


20cm

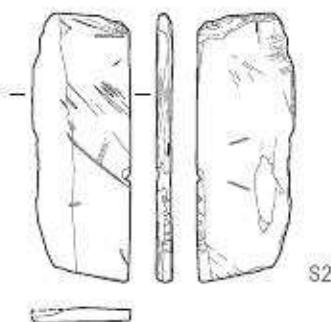
土器 2 (28 ~ 42)

図版 8

石製品



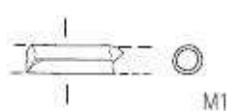
S1



S2



金属製品



M1



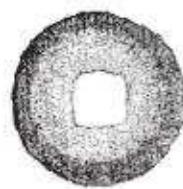
M2



M3



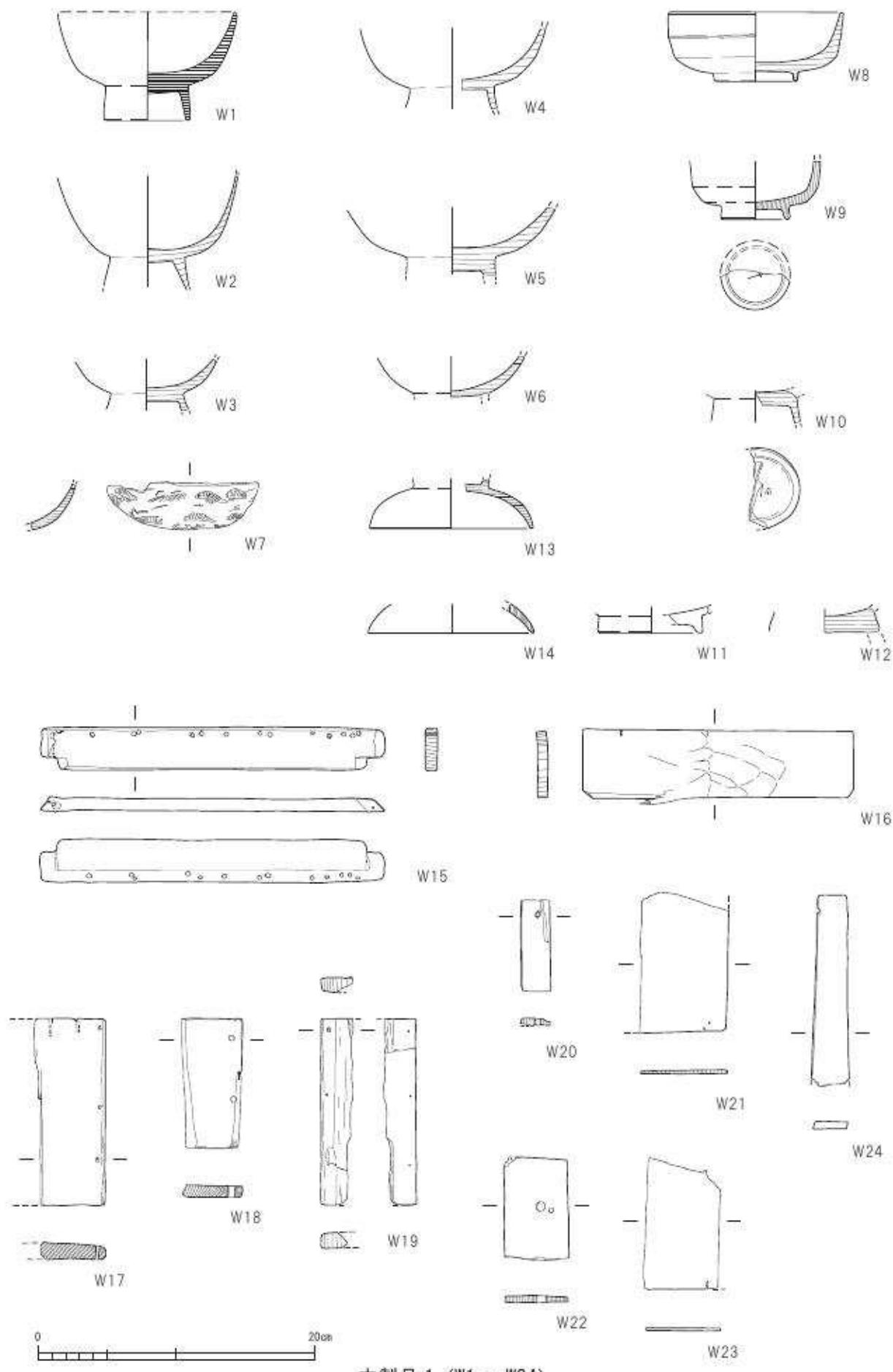
M4



M5

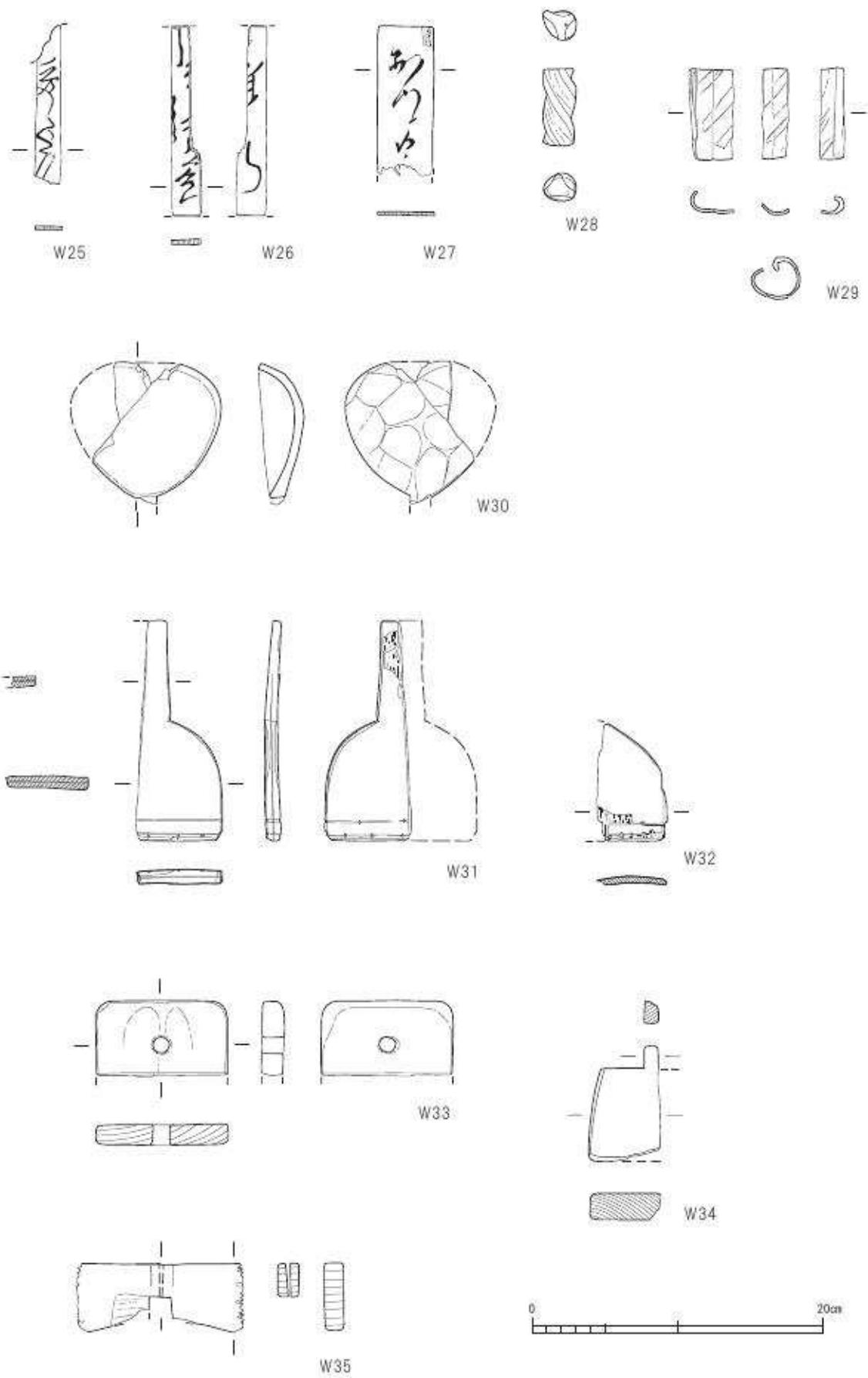


石製品・金属製品

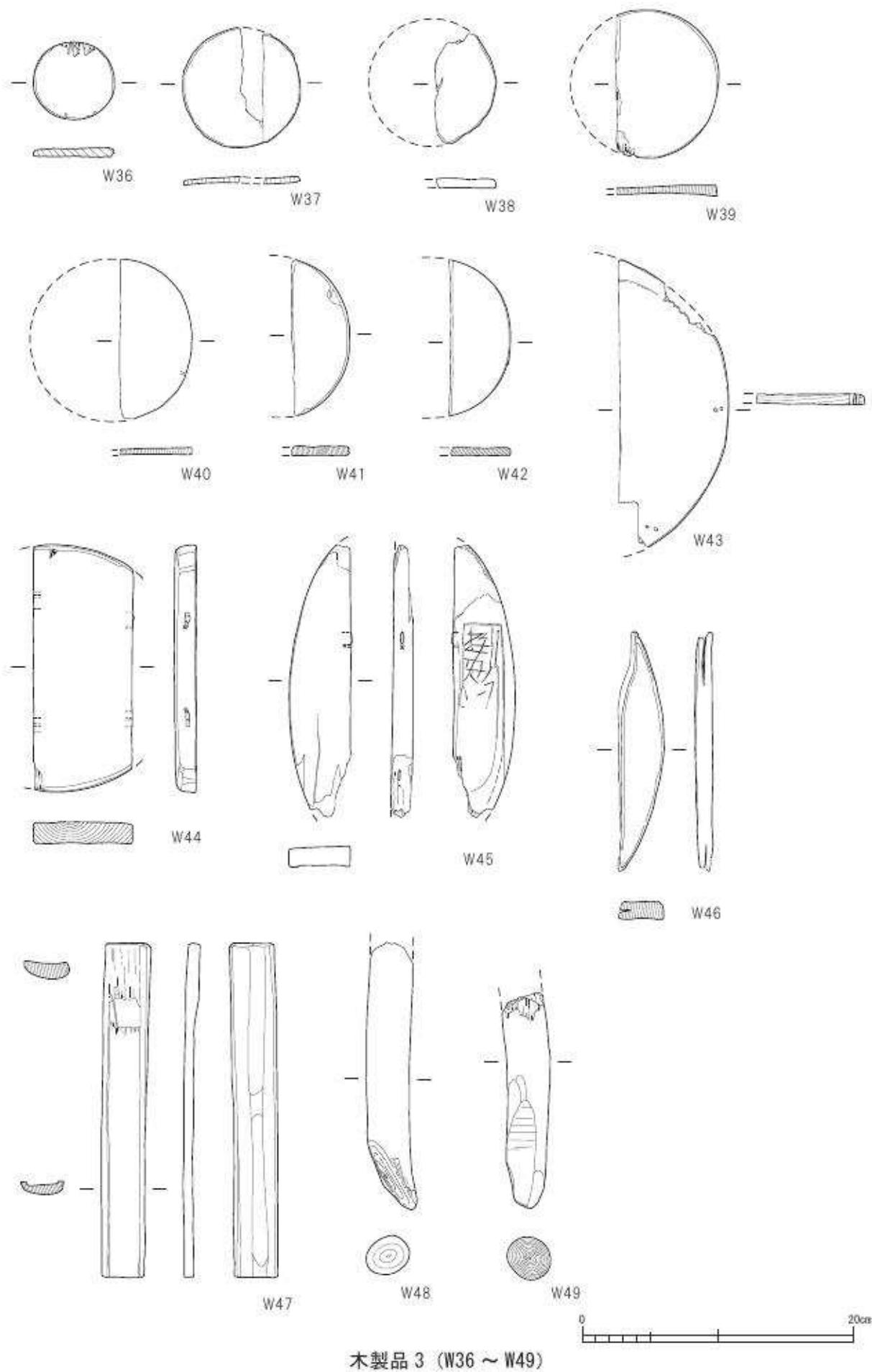


木製品 1 (W1 ~ W24)

図版 10



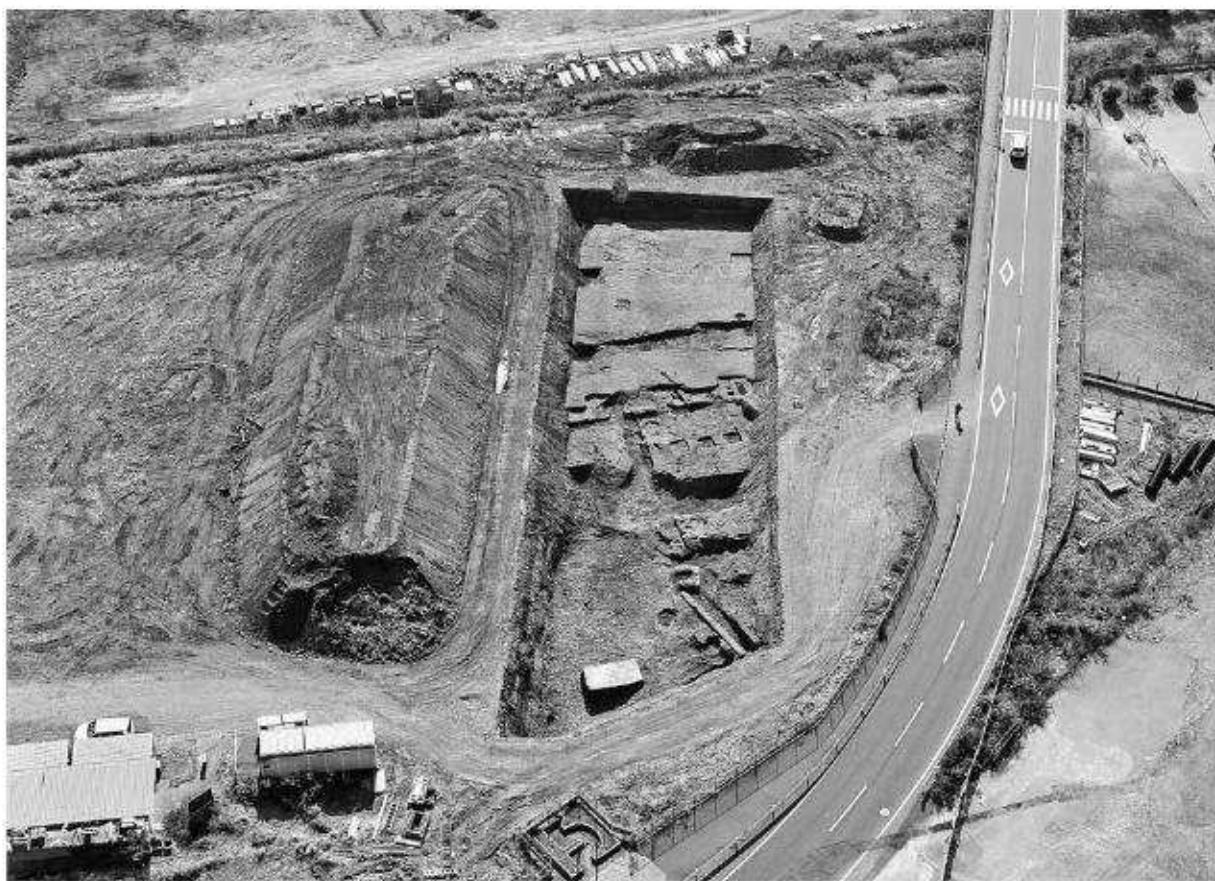
木製品 2 (W25 ~ W35)



写 真 図 版

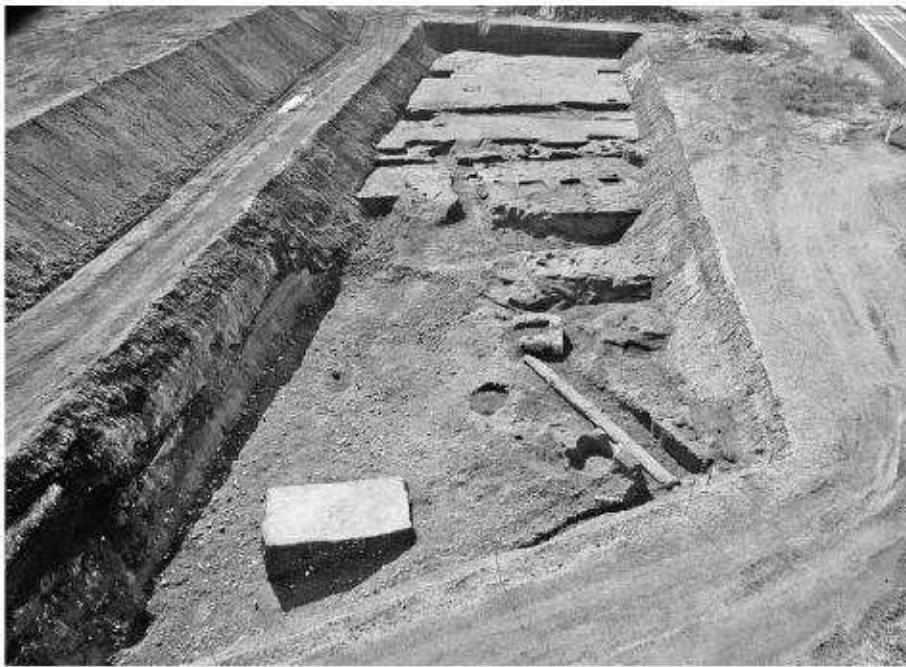


空中写真(北東から)



全景(北東から)

写真図版 2



調査区全景(北東から)



調査区全景(南西から)



流路全景(北から)



北壁(南西から)



北壁(南から)



東壁(北西から)

写真図版 4



流路内獣骨出土状況(北から)



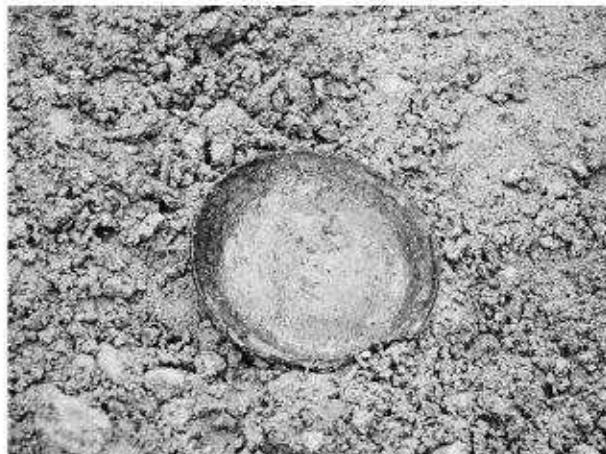
流路内獣骨出土状況(北東から)



流路内獣骨出土状況(南から)



流路内獣骨出土状況(南から)



土師皿出土状況(南から)



刷毛柄出土状況(西から)



漆器椀出土状況(北西から)



漆器椀出土状況(西から)



漆器椀出土状況(北から)



木札出土状況(北から)

写真図版 6



調査前遠景(北から)



機械掘削状況



遺物検出状況



実測図作成状況



現場説明会



空中写真測量状況



埋め戻し状況



土器 1

写真図版 8



土器 2



土器 3

写真図版 10



43



44



出土ガラス瓶・蓋
上左から
45. 46. 47. 48.
下左から
49. 50. 51

土器 4、石製品・金属製品・ガラス製品



W1



W8



W7



W26



W15



W16



W27



W28



W29

木製品 1

写真図版 12



木製品 2



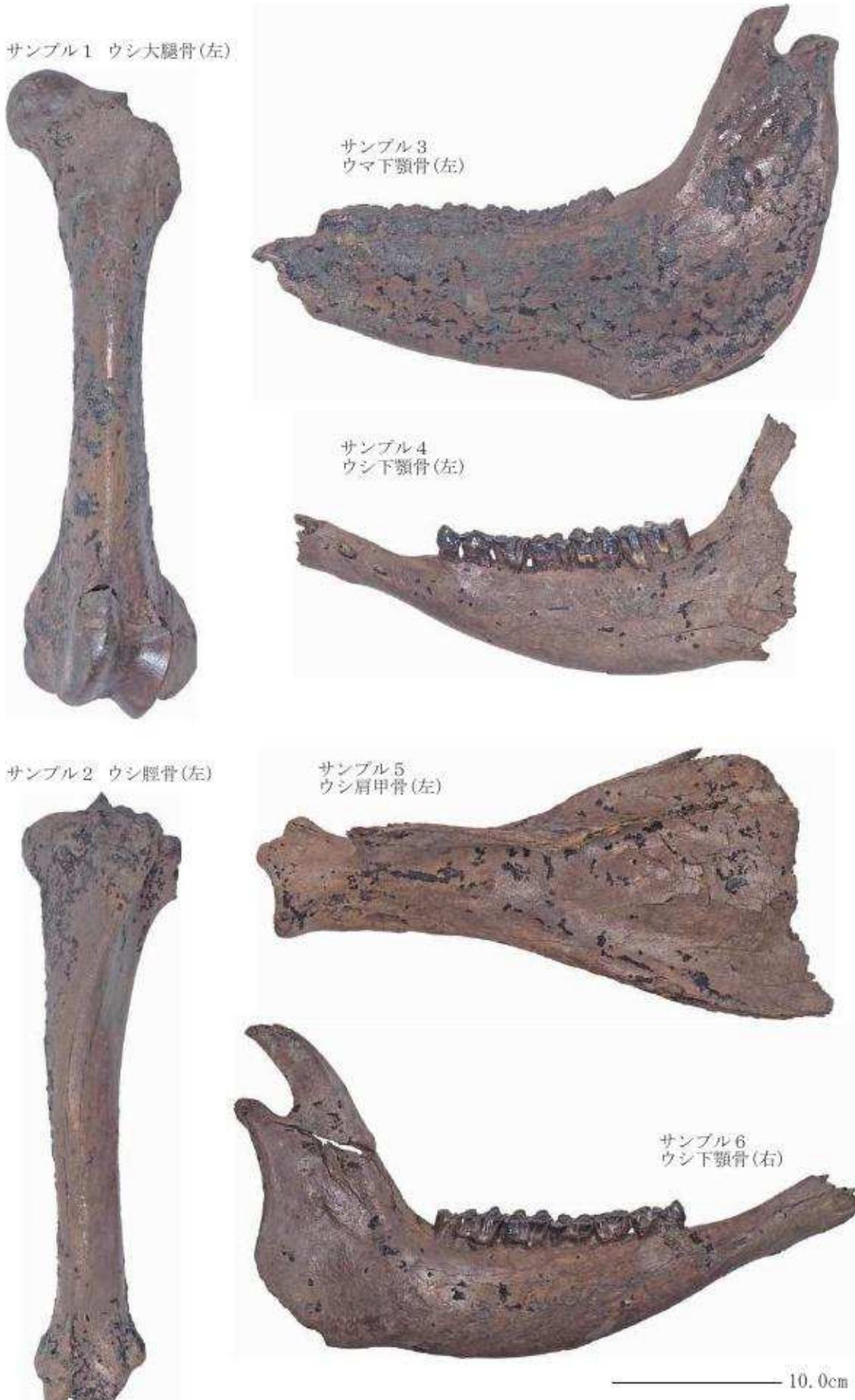
M6



M6

官営八幡製鉄所(福岡県)製レール

写真図版 14



動物遺存体(撮影 文化財科学研究センター)

兵庫県文化財調査報告 第508冊

姫路市

神屋町遺跡

— 姫路駅周辺地区総合整備事業(キャスティ21)に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成31(2019)年3月25日 発行

編集：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号

(兵庫県立考古博物館内)

発行：兵庫県教育委員会

〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷：福田印刷工業株式会社

〒658-0026 兵庫県神戸市東灘区魚崎西町4丁目6番3号
